



「指摘」と「悪口」の境界：「お前はフェイクニュースだ」の成員カテゴリー化分析（特集1 社会学的説明か「社会学的言い訳」か：個人と社会をめぐる現代の議論から）

若狹，優

(Citation)

社会学雑誌, 40:84-97

(Issue Date)

2023-12-25

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100486324>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100486324>



特集1 社会学的説明か「社会学的言い訳」か——個人と社会をめぐる現代の議論から

「指摘」と「悪口」の境界

——「お前はフェイクニュースだ」の成員カテゴリー化分析——

若 狹 優

神戸大学大学院人文学研究科 人文学研究科研究員

一 はじめに——悪口としての社会学的言い訳 批判とフェイクニュース

本特集は「社会学的言い訳批判」に関わるものであり、この論文はその一部である。「社会学的言い訳批判」とは、社会学者には正当な学術的な見解として支持されている事柄が、ある特定の人々にはそのようには理解されず、単なる「言い訳」と言及されることを指す。例えば、社会学者が強盗事件の犯人の動機を社会的な貧困や福祉制度の欠如と結びつけて説明したとき、それに反発する形で「犯人の罪が消えるわけではない」とそのような説明を「言い訳」と断罪し、犯罪の責任の帰属先を犯人という一個人に設定するようなことがある。こうした事態は「社会学的言い訳」という言葉を用いられていないにしても、テレビや雑誌な

どのマスメディアで日常的に広く見かけるものである。社会学者は、こういった言説が社会学の無理解に基づいて行われていると理解し、全く相手にする気にならないかもしれない。しかしながら、社会学者が鼻で笑う「社会学的言い訳批判」的な言説が一定程度、支持されていることもまた事実である。つまり、「社会学的言い訳批判」とは、ある特定の集団（この場合は主に社会学者）にとっては理不尽にその学術的知見の評価を貶める「悪口」であり、かたや別の特定の集団にとっては、きわめて正当な「指摘」なのである。

こうした特性を持った言説は無数に存在する。その代表的なものとして、本稿では「フェイクニュース」を取りあげたい。「フェイクニュース」という言葉は本来、「意図的に作成した偽情報、だます目的で作られたのではな

いが誤った情報、プロバガンダ、陰謀論、うわさ・流言、メディアによる誤報」などの情報を指している（耳塚、二〇二一・二三）。この定義に従うのであれば、「これはフェイクニュースだ」と指摘することや「お前はフェイクニュース（を流布している人間）だ」と指摘することは虚偽の告発として正当なものはずである。しかしながら、耳塚佳代がアメリカ合衆国のドナルド・トランプ元大統領を筆頭に、フィリピン、イスラエル、カンボジア、セネガル、ドミニカ、中国、ベネズエラ、ロシアなど、世界中の政治家が記者や報道機関に対して「フェイクニュース」と指摘している事実を「攻撃する」と表現しているように（耳塚、二〇二一・二九・三〇）、「フェイクニュース」という言葉の使用はときに理不尽な「悪口」として受け取られている。『社会学的言訳』や「フェイクニュース」に代表されるような、集団ごとに理解が異なる言説はいかにして「指摘」と「悪口」の分断を生み出すのか。その一端を知るために、本稿では、「お前はフェイクニュースだ」という発話が行われた相互行為場面を対象とし、そこで「お前」で指し示される人物がいかにして「フェイクニュース」としてカテゴリー化されているのかを「成員カテゴリー化分析（membership categorization analysis）」（Francis & Hester, 2004=二〇一四）の観点から分析する。そのうえで「指摘」と「悪口」という理解の分断が何をもたらしているのかを

考察する。

二 分析枠組——成員カテゴリー化分析

本稿が分析枠組みとして採用する成員カテゴリー化分析とは、ハーヴェイ・サックスが提示した「成員カテゴリー化装置（membership categorization device）」（Sacks, 1972a=一九九五・九七）に着想を得た分析手法である。サックスは、成員がいかにして自らあるいは他者をどのような方法にしたがつてカテゴリー化しているのかを考察するために、成員カテゴリー化装置という概念を考案している。

成員カテゴリー化装置は、「成員カテゴリーの集合（collection of membership categories）」と「適用規則」から成る（Sacks, 1972a=一九九五・九七）。我々が自らあるいは他者をカテゴリー化して理解するとき、そこでは単一のカテゴリーを用いているのではなく、カテゴリーの集合を用いている。例えば、制服姿の男が挙動不審の男を押さえつけているのを見たとき、我々は制服姿の男を「警察官」とカテゴリー化することができる。また、押さえつけられている男は「犯人」と見ることができる。ここでは、「警察官」と「犯人」というカテゴリーは一つの集合としてカテゴリー化に使用されている。一方で、適用規則とは「そうした集合をどのように使うかの規則」（前田・水川・岡

田編、二〇〇七：一一〇）である。この規則の代表的なものととしては、ある集団をカテゴリー化する際には、同一のカテゴリー集合を使用しなければならないという「一貫性規則（consistency rule）」（Sacks, 1972a = 一九九五：九九）や、「母集団の成員をカテゴリー化する時にはいつでも、それぞれの成員に単一のカテゴリーが適用されるだけで、そのカテゴリー化は完全に行われうる」という「経済規則（economy rule）」（Sacks, 1972a = 一九九五：一〇一）がある。こうした規則に基づいて、成員がどのような方法によってカテゴリー化されているのかを経験的に記述しようとするのが、成員カテゴリー化分析である。

成員カテゴリー化装置というアイデアは実に様々な論点を持っているが、本稿が注目したいのは、「カテゴリーと結びついた活動（category-bound activities）」（Sacks, 1972b = 二〇二二：一一八；1992: 582）である。例えば、「警察官」というカテゴリーには「犯罪者を逮捕する」という活動が結びついているといえる。この結びつきがあるからこそ、我々は道端で警察官が男を羽交い締めに行っているのを見かけたら、それが「犯罪者を逮捕する」という活動の一環だと理解することができる。もしこれが警官の制服姿ではない人間であった場合、我々はその活動を犯罪者の逮捕とは一瞥して判断することはできないだろう。このように、カテゴリーと活動の結びつきは眼前で展開される活動の理解

を可能にする道具立てとなっているのだ。

もちろん、カテゴリーに結びついているのは活動だけではない。例えば、「専門家、素人」というようなカテゴリー集合であれば、専門家であれば持っているであろう知識や経験、素人に対して持っている権利や義務などが結びついている（前田・水川・岡田編、二〇〇七：一一八）。こうしたカテゴリーが持つ特徴は「カテゴリーと結びついた述部（category-tied predicates）」（Stokoe, 2012 = 二〇一八：一五七）という。

本稿が対象としている、ある特定の人物を「フエイクニュース」としてカテゴリー化する際にも、もちろん「カテゴリーと結びついた活動」や「カテゴリーと結びついた述部」は用いられている。しかしながら、通常のカテゴリー化実践と比べて特殊なのは、「フエイクニュース」のカテゴリー化実践は、カテゴリー化の対象となった人物をいわゆる「普通の人間」ではなく、「異常な人間」として提示する点にある。分析を先取りする形になるが、「フエイクニュース」の実践には「異常な人間」として、対象者を提示する技法が含まれているのである。

三 「フェイクニュース」のカテゴリー化論理(一) ——「素人」における二つの論理

分析対象とするのは、アメリカ合衆国の元大統領、ドナルド・トランプによる「お前はフェイクニュースだ」の発言である。参照する記事は Trump hits CNN and Washington Post reporters as 'fake news, during briefing (THE HILL, 二〇二〇年四月二三日掲載) で、この記事に示されているトランプと記者のやりとりを分析する。

この記事は、二〇二〇年四月二三日のホワイトハウスでの記者会見で、アメリカ合衆国国土安全保障省が新型コロナウイルスは熱と湿度によって抑制できると示した報告について質問した『ワシントン・ポスト』のリポーター、フィリップ・ラッカーに対して、トランプが「私は大統領で、お前はフェイクニュースだ」と述べたことを伝えている。記事には動画が添付されており、記者とトランプのやりとりの一部始終を見ることができる。以下の記述は、その動画を見て、トランプが「お前はフェイクニュースだ」と述べた前後の部分を簡単に書き起こし、和訳したものである。トランスクリプトの先頭にある「T」はトランプを、「R」は記者を意味している。

R…あなたは大統領で、人々はこれらの会見を注視し

ています。人々は情報や助言を欲しがっていますし、何をすべきか知りましたがっています。(トランプが発言を遮る) 人々はデマを知りたいわけではない……。

T…おい、ファイル、ファイル。私は大統領で、お前はフェイクニュースだ。お前は私これから言うこともわかつているはずだ。よくわかるように話してやる。私はお前をよく知っている。この手の連中をよく知っているから、こいつが書いているものも見ている。こいつは完全な嘘つきだ。それで、準備はいいか？ いいか？ いいか？ これは、とても賢い、おそらく優秀な人がいる優秀な研究室からの単なる提案に過ぎないんだ。その研究者は太陽や熱について話していて、お前は数字を見ている。ただ、それだけだ。私が持っているのはそれだけ。私はただ才能を紹介するためにここにいるのだ。私は、我々がこの事態を打開するためのアイデアを求めているから、そのアイデアを示すためにここにいる。そして、もしその研究者が優秀で、日光が良いのであれば、それは素晴らしいことだね、私としては。はい、次の質問。

このやりとりでは、まず記者はトランプを「大統領」と

わざわざ呼ぶことから発話を開始している。アメリカ国民は新型コロナウイルス感染症対策のために何をすればよいのかを知りたがっているが、政府は熱と湿度で抑制できると述べており、記者はそれを「デマ」と言う。つまり、トランプは「大統領」としての義務である適切な科学的知見に基づいた新型コロナウイルス感染症対策の提供を怠っているのではないかと、記者はトランプが「大統領」であることを、「定式化すること (doing formulating)」(Garfinkel & Sacks, 1970)を通じて、自らの主張を組み立てている。ここで記者が用いている成員カテゴリー化装置は「大統領、記者」という成員カテゴリーの集合から成るものである。このカテゴリー集合は、記者会見における義務と権利の關係にしたがって運用されている。つまり、「記者」は「大統領」に対して適切な情報を要求する権利を持ち、「大統領」はそれに対して答える義務を有しているというわけだ。記者はこの成員カテゴリー化装置を用いて、トランプの責任を追及している。

これに対して、トランプは自らを「大統領」としたあと、記者を「フェイクニュース」とカテゴリー化している。続けて、トランプは「私はお前を知っている」と述べ、記者を「フェイクニュース」とカテゴリー化する資格が自らにはあることを示している。ここでの記者に対する知識の「深さ」はカテゴリーと述部の関係性から生じるものではない。

したがって、例えば、「親」における「子ども」に対する知識のように、規範的に期待できるものではない。だからこそ、トランプは「知っている」と主張しなければならない。トランプが自らと記者をカテゴリー化する際に使用している「大統領、フェイクニュース」から成る成員カテゴリー化装置の適用規則は「真実を語るかどうか」というものだけといえる。だが、この適用規則を運用するためには、記者が真実を語っていないという根拠を示さなければならぬ。そのために、トランプは新たな成員カテゴリー化装置を発話のなかに導入し、カテゴリー化のためのカテゴリー化を行っている。

発話のなかで、トランプは研究者について言及することで、新たな成員カテゴリー化装置を導入する。その成員カテゴリー化装置とは「専門家、素人」であり、もちろん、その適用規則は「化学に関する専門的知識を有しているか」である。この成員カテゴリー化装置によって、「専門家」として研究者、「素人」としてトランプと記者がカテゴリー化される。注目すべきなのは、トランプは「素人」として自らと記者に同じカテゴリーを適用している点である。こうしたカテゴリー化は何をもたらすのだろうか。

まず、自らを「素人」とカテゴリー化する実践から見ていこう。トランプは国土安全保障省の報告が「単なる提案に過ぎない」とし、大統領である自分はただそのこと

を伝えているだけだという。ここでは、トランプは自らを「素人」とすることで、その専門的知識に対する責任を負う立場にはなく、記者の追及が見当違いのものであるという主張を組み立てている。

その一方で、トランプは記者を「素人」としてカテゴリー化する。「とても賢い、おそらく優秀な」研究者は「太陽や熱」について話しているが、記者は「数字」を見ている。ここで示されているのは「専門家」と「素人」をめぐる知識の差である。「専門家」である研究者は、あくまで太陽や熱に関する知識について話しているだけであり、「素人」である記者は数字しか見ていない。こうした主張は、トランプが「専門家」と「素人」における規範的な期待としての「知識の差」を利用して、記者の指摘が研究者のそれよりも信用にならないものであることを示している。

トランプは自らと記者に「素人」というカテゴリーを適用することで、記者会見での回答の義務を回避し、記者を何も知らずに見当違いなことを言っている存在として提示している。こうした「素人」カテゴリーの運用を通じて示した根拠によって、記者に対する「フェイクニュース」というカテゴリー化は達成される。すなわち、トランプは国土安全保障省の報告が「デマ」なのではないかという記者の指摘に対する反論として、記者が用いている成員カテゴリー化装置の運用の誤りを指摘しているのである。記者が

デマまがいの報告をしたことに対する大統領の責任を問うことに対して、トランプは、この報告は単なる提案であり、自分はそれを伝えただけに過ぎず、責任を負うことはないと言う。また、研究者も単に専門的な知識について報告したのであり、「素人」の記者よりも適切なことを述べている。このように、国土安全保障省の報告に対する責任は大統領に帰属することは間違いであり、そのような理解をしている記者である「お前」は「フェイクニュース」なのだとカテゴリー化しているのである。

しかしながら、ここまでの分析だけだと、記者が「フェイクニュース」とカテゴリー化される実践の論理はある程度わかったとしても、なぜ記者が「フェイクニュース」すなわち「正直者、嘘つき」から成る成員カテゴリー化装置を用いて適用されなければならないのかはまだ明らかになっていない。このことを問うためには、そうしたカテゴリー化の論理を用いて、「正直者、嘘つき」の成員カテゴリー化装置を使い、トランプが記者会見のなかで何を達成しようとしているのかを分析の中に取り込む必要がある。彼の目的は、こうした追及を回避することである。だからこそ、トランプは「素人」カテゴリーを巧みに運用して、自らがその質問に答えられないことを示してみせた。しかしながら、それは質問に答える立場にないことは示すことができても、答えないという選択を取ることはできない。なぜな

ら、大統領の記者会見において、記者からの質問に理由なく答えないのは、大統領を担う資格がないものと見なされるからである。したがって、記者からの質問を無視するためには、質問に答えないことが「正当」であると理解されるような技法が必要となる。「フェイクニュース」というカテゴリーはその技法に関わっている。

四 「フェイクニュース」のカテゴリ化論理(二) ——「異常な人間」の呈示

記者会見は大統領が記者からの質問を受け、それに答えることが規範的に期待される場である。こうした場で、その質問に答えないようにする方法としては、いくつか考えられる。政治家が国会答弁の際に口にする「記憶にございません」はその好例である。質問者からある出来事に対して問い質された際に、そのことに関する「記憶」がないと示すことは、そもそもその出来事があったのかどうか、そこで何が行われたのかについて説明できないことを示すことにつながる。回答者は質問に対する回答の能力を有していないことを示して、その質問に対する回答を拒否しているのだ。

しかしながら、「記憶にございません」という拒否は回答者の「フェイス(face)」(Goffman, 1967=二〇〇二:

五)を潰すことにもつながる。「二〇一三年六月五日のお昼ご飯は？」のような些末な事実ではなく、「一ヶ月前の衆議院議員選挙」といった政治家にとっての大きなイベントのような事実に関して「記憶がない」というのは、我々が一般的な人間に対して行う「現世的推論(mundane reasoning)」(Pollner, 1975=一九八七:五五)には食い違ふものであらう。それゆえに、この答弁は資質を疑うことにつながる。「記憶にございません」という答弁は、質問を拒否することを可能にするものの、そのような人間が政治家や大臣といった要職を努めていいものかという役割の資格に関する問題を引き起こすのである。

その一方で、「お前はフェイクニュースだ」という発話は、「記憶にございません」とは対極的に、記者という役割における資格に関する問題を引き起こすものといえる。記者は「事実」を伝える者として規範的に期待されるが、記者であるにも関わらず「フェイクニュース」を伝えるのであれば、そのような不誠実な人間にはその役割を全うする資格がないことにつながる。アーヴィング・ゴフマンが言うように、相互行為において嘘をつく人は「二度と全幅の信頼を寄せることができない」(Goffman, 1959=二〇二三:一〇四)者になってしまうのだ。

相互行為のなかで信頼を寄せることができない人物とされることは、記者の「フェイス」が失われることを意味する。

そうになると、大統領は記者を「マナを持たない者」として取り扱うことが可能となる。日常的な相互行為場面において「フェイス」を失った者がどのように取り扱われるかは、子どもや老人、「ステイグマ」(Goffman, 1963a = 「一九七〇」二〇〇一)を持った人々を見るとわかりやすい。ゴフマンによれば、子どもは「まだマナを十分に持っていない」存在であり、老人は「それを失った」存在である(Goffman, 1963b = 「一九八〇・一五」)。また、ステイグマを持つ人は常人とは異なる存在と捉えられる。薄井明によれば、常人はステイグマを持つ人に対して「普通の自然の態度」をとることができず、ステイグマを持つ人に対して過度に配慮をしてみせたり、神秘的な存在として取り扱ったり、差別や虐待の対象として捉えたり、あるいは「存在しない人」として取り扱われるようになる(薄井, 二〇二二: 五六・六〇)。子どもが大人の会話に加わりうとしたとしても、それは「市民的不注意(civil inattention)」(Goffman, 1963b = 「一九八〇: 九三」)によって「存在しない人」として、相互行為から弾き出される。このように、「フェイス」を失った人は、普通の人間との相互行為なら適用される道徳的規則が適用されなくなる。したがって、記者会見における「記者の質問に対して適切な回答を行う」という規則も、「フェイス」を失った記者を相手にする場合は無視しても良いものとなる。

記者の「フェイス」を失わせて質問を回避するためには、記者を「嘘つき」という「異常な人間」として位置づけるようにカテゴリー化を行わなければならない。そこで使われる手法がカテゴリーとカテゴリーに結びついた活動や述部の背反である。トランプは記者をカテゴリー化する際に、その背反を巧みに利用している。

カテゴリーと活動や述部との結びつきは規範的に期待されるものである。したがって、そこに食い違いが生じると、理解に問題が生じる。この問題を利用して、参与者に新たなカテゴリー化をすることができると。そのことを端的に示している事例を見ておこう。その事例とは、ドロシー・ミスが論文「Kは精神病だ」(Smith, 1978 = 「一九八七」)で取りあげている、アンジェラのカテゴリー化の実践である。アンジェラはここで、Kを「精神病患者」としてカテゴリー化するために、カテゴリーと述部の背反を利用している。以下の記述はその好例である。

- ① 暑い日に私たちはよく海辺やプールに出かけた。
- ② そして私は、ただ水につかって日光浴をするくらいだった。
- ③ ところがKは(プールの端から端まで)三十回は泳ぐと言いつつ張った。

(Smith, 1978 = 「一九八七: 一四〇」)

この記述で、アンジェラは①で状況を伝え、②で「このタイプの場面の指示する適切な行動の模範」を示したうえで、③でKの行動が「異常」なものであると示している(Smith, 1978: 一九八七: 一四〇)。カテゴリーと述部の関係性の背反を強調することで、Kを「精神病患者」としてカテゴリー化しようとしているのである。

ここまで見てわかるように、「精神病患者」と「常人」というカテゴリー集合を持つ成員カテゴリー化装置の適用規則は「カテゴリーと述部の規範的なつながりに背反しているかどうか」ということになる。こうした適用規則を持つ成員カテゴリー化装置は他にも存在する。例えば、「モントリオールの虐殺」で知られるマーク・レパインの科学技術専門学校の女子生徒を「フェミニスト」とカテゴリー化するために用いられた成員カテゴリー化装置も該当すると言えるだろう(Eglin & Hester, 1999: 二〇〇〇)。

トランプは記者を「フェイクニュース」とカテゴリー化する際、自らのカテゴリー化の論理のなかで使用した「専門家、素人」という成員カテゴリー化装置を「根拠」として利用している。「大統領」は研究者からの研究報告を伝えただけに過ぎず、「研究者」は自らの専門分野の知見に関して政府に報告したに過ぎない。こうしたカテゴリーと述部の関係性を改めて示すことで、トランプは本来、記者であるならば、理解できると期待される事柄を理解できて

いないことを示している。そして、そうした理解が及んでいないにも関わらず、記者がトランプを「デマ」と呼ぶことに対して、トランプは「フェイクニュース」と指摘する。つまり、記者は「大統領」ならびに「研究者」のカテゴリーと述部の関係性を理解していない、あるいは理解しているにも関わらず、そうした点を無視して、大統領のイメージダウンを狙って意図的に自らを「デマ」と呼ぼうとしている。したがって、トランプは記者を「フェイクニュース」と呼び、「異常な人間」であると指摘するのである。そこで使用されている成員カテゴリー化装置の適用規則になっているのが、「発話のなかで示されたカテゴリー化の論理を理解できているか」なのである。

以上のようなカテゴリー化実践を通じて、トランプは記者を「異常な人間」として記者会見における質問の拒否を達成している。こうした記者を「フェイクニュース」と呼ぶことで質問を拒否する手法は他の会見でも用いられている。トランプをはじめとした政治家のこうした発言はしばしば荒唐無稽なものとして受け取られるが、成員カテゴリー化分析を通じて明らかになったのは、彼・彼女らの主張には明確な論理があり、その論理はきわめて精緻なものであるということである。こうした点から「社会学的言ひ訳批判」を見ると、どのように考察することができるだろうか。

五 おわりに——社会学的言い訳批判と「分断」

本稿では、「社会学的言い訳批判」がもたらす「指摘」と「悪口」の分断を考察するために、同じ特性を持つ「フェイクニュース」というカテゴリーの運用を実際の相互行為場面を事例として取りあげて、成員カテゴリー化分析の観点からごく簡単に検討してきた。

記者が政治家を失脚させるために意図的な情報を新聞記事として書いたり、デマを書いたりしていると言われることは、当たり前だが、現代において突然生じたことではない。噂やデマ、流言は以前から存在していて、山口真一が言うように、現象としてのフェイクニュースは「ソーシャルメディアの普及により、量が増えて大規模化しやすくなったということに過ぎない」（山口、二〇二二：七六）。しかしながら、そうした記者やソーシャルメディアでの情報発信者などを「フェイクニュース」と呼ぶようになったことそれ自体は、明確に新しいものといえる。そして、それは非常に重要である。なぜなら、サックスが言うように「支配的なカテゴリーは、基本的に、人々が現実をどのように理解するかを規定している」のであり（Sacks, 1979：一九八七：二六）、「フェイクニュース」というカテゴリーが生まれ、使われているこの現状は、間違いなく旧来のそれとは異なる現実の見方を創り出しているといえ

る。その点で、「社会学的言い訳批判」も同様である。

トランプは記者を「フェイクニュース」としてカテゴリー化する際、「専門家、素人」のカテゴリー化論理を使用し、それを理解できない（あるいは、理解しているにも関わらず何らかの意図に基づいて無視している）人間として記者を位置づけていた。こうした実践の特徴は、この実践を通じて、カテゴリー化の対象となった人物の「フェイス」を潰す点にある。トランプの「フェイクニュース」の場合、それは記者会見での質問の拒否という道徳的規則の違反を正当化する目的のもとに成されていた。「社会学的言い訳批判」という実践も同様に、人々の日常的なやりとりのなかで、道徳的規則の違反を正当化するものとして行われることも考えられる。ある参加者が「それは社会学的言い訳に過ぎない」と別の参加者に向けて発話するとき、その発話を通じて、その参加者は「社会学的言い訳をする人」としてカテゴリー化され、それ以降に何を伝えても、それらは全て「言い訳」として聞こえ、それによって以降の発話に対して適切に応答することを拒否することができるようになってしまう。この点で、「フェイクニュース」や「社会学的言い訳批判」は対立を促進するカテゴリー化実践だと言えるだろう。

それゆえに、「フェイクニュース」や「社会学的言い訳批判」は政治思想の分極化（辻編、二〇二二；Bai, 2021＝

二〇二二の象徴として捉えることも可能であろう。ただ、注意しなければならないのは、何が「分断」しているのかという点である。先述した、相手の「フェイク」を潰すカテゴリー化実践はたしかに対立を生むものであるが、「フェイク」が潰されても仕方ないと社会的に広く見なされている人であれば、それは対立にはならない。「フェイクニュース」や「社会学的言い訳批判」が対立を促進するカテゴリー化実践となるのは、その実践を一部の人が正当なものとして受け入れる一方で、他方ではその実践が不当なものとして受け入れるときである。本稿が明らかにしてきたことから言えば、そうした理解の原因となっているのは、規範的に期待できるカテゴリーと活動・述部の関係性に対する集団間での理解の差異である。

カテゴリーと活動・述部の関係性の期待に集団の間で差異があれば、それは「現実の見方」の差異につながり、「指摘」と「悪口」の境界となる。さらには、どちらのカテゴリーと活動・述部の関係性が適切であるかをめぐるせめぎ合いが生じるだろう。「フェイクニュース」や「社会学的言い訳批判」というカテゴリー化実践は、このせめぎ合いの中心に現れるものである。したがって、「社会学的言い訳批判」を経験的に考察するためには、その発話が用いられている相互行為場面それ自体を分析対象とし、その秩序がいかにして達成されているのかを明らかにしなければならない。

らない。政治的な発言、学術的な論争、ソーシャルメディアでのやりとりなど、あらゆる場面で「社会学的言い訳批判」は生じると考えられる。それらを丹念に観察し、記述することが「社会学的言い訳批判」を理解するための第一歩となるだろう。

注

- (1) サンダー・ヴァン・デル・リンデンらの研究によれば、アメリカ合衆国における「フェイクニュース」の理解は党派によって分かれてくる (Linden et al.: 2020)。本稿の議論に即して言えば、共和党支持者は「フェイクニュース」であると「指摘」するメディアは、民主党支持者にとっては全うなメディアであり、共和党支持者からの指摘は「悪口」として理解されるだろう。
- (2) 小宮友根が指摘するように、サックスの成員カテゴリー化装置というアイデアは、彼がエマニュエル・シエグロフらと共に展開した「会話分析」とは切り離されて考えられることも多いが、むしろ社会成員が行っている活動を經驗的に記述するという点においては、成員カテゴリー化装置も、会話分析も一貫した関心のもとに展開されていると見るべきである (小宮、二〇二二・九八)。それに従えば、本稿におけるトランスクリプトの記述も、会話分析の表記 (Jefferson, 2004) に従うほうがより正確であろう。しかし、今回は分析の関係上、精緻な書き起こしを必要はないと判断し、以上のような記述となった。
- (3) 和訳の際には、トランプの話し方を再現するために、意図的に

記者と言葉遣いを変えている。その際、ネイティブ・スピーカーにトランスクリプトを確認してもらい、訳のテイストに関して意見をもらい、反映している。和訳の際に作成した原文のトランスクリプトは付録に記載している。

(4) 邦訳では、「face」は「面目」と訳されている。しかしながら、ここでは原文の意図を明確にするため、「フェイス」と訳し直している。

(5) 邦訳では、「civil inattention」は「儀礼的無関心」と訳されている。しかしながら、ここでは原文の意図を明確にするため、「市民的不注意」と訳し直している。

(6) 例えば、二〇一七年、まだ大統領候補であったトランプはCNNの記者であるジム・アコスタが記者会見で質問を試みた際、「お前じゃない、お前じゃない」とトランプは言い、続けて「お前の組織はひどい。お前の組織はひどい。黙れ、黙れ。『おそらく別の記者と思われる』彼女が質問をしているんだ。無礼なことをするな」と言った。その後、アコスタが「我々の報道機関を攻撃しているのだから、我々に質問してくれないか？」と繰り返し問うたところ、トランプは「お前に質問をするつもりはない。お前はフェイクニュースだ」と返答したという (Tani, 2017)。

付録

R : You're the president and people tuning into these briefings, they want to get information and guidance and want to know what to do. (トランプが割り込んでくる) They're not looking for rumor.

T : Hey, Phil, hey Phil. I'm the president and you're fake news. And you know what I'll say to you. I'll say very nicely, I know you well. I know you well. Because I know the guy, I see what he writes. He's a total faker. So, are you ready? Are you ready? Are you ready? It's just a suggestion from a brilliant lab, by a very, very smart, perhaps brilliant man. He's talking about sun, he's talking about heat, and you see the numbers. So that's it. That's all I have. I'm just here to present talent. I'm here to present ideas because we want ideas to get rid of this thing. And if heat is good and if sunlight is good, that's a great thing as far as I'm concerned. Go ahead.

文献・資料

- Bail, Chris, 2021, *Breaking the Social Media Prism: How to Make Our Platforms Less Polarizing*, Princeton: Princeton University Press. (松井信彦訳、二〇二二『ソーシャルメディア・プリズム——SNSはなぜヒトを過激にするのか』みすず書房。)
- Eglin, Peter & Stephen Hester, 1999, "You're All a Bunch of Feminists: Categorization and the Politics of Terror in the Montreal Massacre," *Human Studies*, 22(2): 253-72. (小松栄一訳、二〇〇〇『「おきえよ」はみんなフェミニストの一味だ』——カテゴリー化とテロの政治「文化と社会」二：七四・九八。)
- Francis, David & Stephen Hester, 2004, *An Invitation to Ethnomethodology: Language, Society and Interaction*, California: Sage Publications. (中河伸俊・岡田光弘・是永論・小宮友根訳、二〇一四『エスノメソロジーへの招待——言語・社会・相互行為』ナカニシヤ出版。)

Garfinkel, Harold & Harvey Sacks, 1970, "On formal structures of practical action," John C. McKinney & Edward A. Tiryakian eds, *Theoretical Sociology: Perspectives and Developments*, New York: Appleton-Century-Crofts, 338-66.

Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York: Doubleday. (中河伸俊・小島奈名子訳, 二〇一三, 『日常生活における自己呈示』筑摩書房。)

——, 1963a, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, New Jersey: Prentice-Hall. (石里毅訳, 一九七〇, 二〇〇一, 『ステイタムの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房。)

——, 1963b, *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, Glencoe: Free Press. (丸木恵祐・本名信行訳, 一九八〇, 『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』誠信書房。)

——, 1967, *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behaviour*, New York: Doubleday. (浅野敏夫訳, 二〇〇一, 『儀礼としての相互行為〈新訳版〉——対面行動の社会学』法政大学出版局。)

Jefferson, Gail, 2004, "Glossary of Transcript Symbols with an Introduction," Gene H. Lerner ed., *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

小宮友根, 二〇一三, 『社会学の記述』の試み——『成員カテゴリー化装置』読解——山崎敬一・浜日出夫・小宮友根・田中博子・川島理恵・池田佳子・山崎晶子・池谷のぞみ編『エスノメソドロジー・会話分析ハンドブック』新曜社, 九八・一一〇。
Linden, Sander van der, Costas Panagopoulos & Jon Rozenbeek, 2020,

"You Are Fake News: Political Bias in Perceptions of Fake News," *Media, Culture & Society*, 42(3): 460-70.

前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編, 二〇〇七, 『ワードマップエスノメソドロジー——人びとの実践から学ぶ』新曜社。

耳塚佳代, 二〇二一, 「フェイクニュースとは何か」藤代裕之編『フェイクニュースの生態学』青弓社, 二二・四五。

Moreno, J. Edward, 2020, "Trump hits CNN and Washington Post reporters as 'fake news' during briefing," THE HILL, April 27, 2020. (Retrieved February 10, 2023, <https://thehill.com/homenews/administration/494426-trump-hits-cnn-and-washington-post-reporters-as-fake-news-during>).

Pollner, Melvin, 1975, "The Very Coinage of Your Brain: The Anatomy of Reality Disjuncture," *The Philosophy of the Social Sciences*, 5: 411-30. (山田富秋・好井裕明・山崎敬一訳, 一九八七, 「お前の心の迷い」です——リアリティ分離のアナトミー」『エスノメソドロジー——社会学的思考の解体』せりか書房, 四一・八六。)

Sacks, Harvey, 1972a, "An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology," David Sudnow ed., *Studies in Social Interaction*, New York: Free Press, 31-74. (北澤裕・西阪仰訳, 一九九五, 「会話データの利用法——会話分析事始め」『日常性の解剖学——知と会話』ベルジュ社, 九三・一七三。)

——, 1972b, "On the Analyzability of Stories by Children," John J. Gumperz & Dell Hymes, eds., *In Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*, New York: Rinehart & Winston, 325-345. (小宮友根訳, 二〇二一, 「子どもの物語の分析可能性」山崎敬一・浜日出夫・小宮友根・田中博子・川島理恵・池田佳子・山崎晶子・池谷のぞみ編『エスノメソドロジー・会話分析ハンドブック』

ク』新曜社、二〇一一年・二〇一二年。

——, 1979, "Hotrodder: A Revolutionary Category," George Psathas ed., *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, New York: Irvington Publisher, 23-53. (山田 富秋・好井裕明・山崎敬一訳「一九八七・「ホットロッダー——革命的カテゴリー」『エスノメソドロジ——社会学的思考の解体』せりか書房、二〇一四年。)

——, 1992, *Lecture on Conversation vol.1*, Oxford: Blackwell.

Smith, Dorothy, 1978, "'K is mentally ill': The Anatomy of a Factual Account," *Sociology*, 12(1): 23-53. (山田 富秋・好井裕明・山崎敬一訳「一九八七・「Kは精神病——事実報告のアナトミー」『エスノメソドロジ——社会学的思考の解体』せりか書房、八七・一六五。)

Stokoe, Elizabeth, 2012, "Moving Forward with Membership Categorization Analysis: Methods for Systematic Analysis," *Discourse Studies*, 14(3): 277-303. (北村隆憲・是永論訳「二〇一八・「成員カテゴリー分析」を前進させる——体系的分析法の試み」『東海法學』五五・一七二・一四〇。)

Tani, Maxwell, 2017, "Trump battles CNN reporter in heated exchange at press conference: 'You are fake news'" INSIDER, January 12, 2017, (Retrieved March, 6, 2023, <https://www.businessinsider.com/cnn-fake-news-donald-trump-cnn-jim-acosta-question-press-conference-2017-1>).

辻大介編、二〇二二年、『ネット社会と民主主義——「分断」問題を調査データから検証する』有斐閣。

薄井明、二〇二二年、『「ステイグマ」というエニグマ——ゴフマン社会学の新たな地平へ』誠信書房。

山口真一、二〇二二年、『ソーシャルメディア解体全書——フェイクニュース・ネット炎上・情報の偏り』勁草書房。